

御挨拶

住職 堤 俊翁

新年明けましておめでとうございます。

21世紀の夜明けが訪れました。前途多難な幕開けですが、難しい時代だからこそ、人びとの叡智が光るのではないのでしょうか？

歴史に学んでも数々の困難を先人達は乗り越えてきました。

さて、右に掲げていますように、浄土宗では21世紀の初頭にあたり、法然上人の御心を活かすべく劈頭宣言を行いました。

また、無量寺では、より多くの人びとにお念仏の教えを伝えたく、インターネットにホームページを開きました。

通信技術の発展は、印刷術が発明されて以来の大きな歴史の転換点になることでしょう。

さらに、本号より特別連載として、奈良正福寺住職の別府空由上人の書『念佛者の心』を掲載します。

念佛とはなにか？人生とは？釈尊の教えとは？等などの疑問に大きなヒントを与えていただけるものと思います。合掌

10月21日土曜日午後4時から檀信徒研修会を行いました。

浄土宗福岡雅楽会鎮西楽所の僧侶のみなさんが奏でる優雅な調べは本堂が西方極楽浄土になったようなひとときを過ごすことができました。

舞 楽 蘭陵王



浄土宗福岡雅楽会鎮西楽所



法然上人の心を世界へ

浄土宗 21世紀劈頭宣言

法然上人を宗祖と仰ぐ浄土宗は21世紀を迎え、すべての人びとの幸せを願って、ここに宣言する。

愚者の自覚を

家庭にみ仏の光を

社会に慈しみを

世界に共生を

二十世紀は人間の限らない可能性を信じた時代であった。科学技術の進歩、合理的思想、それらは人間の生活や文化の領域を拡大してきた。しかし、一方、恐るべき核兵器の開発、国家や民族間の対立、地球環境の破壊、人間の欲望の肥大、家庭の崩壊、道徳や教育の荒廃など負の遺産もまた生じた。これらをひきつがざるをえない我々は、法然上人の説かれた「愚者の自覚」に立ち返って、これを解決すべく平和、環境、倫理、教育、入権、福祉などの諸問題に取り組みなければならぬ。

法然上人は、阿弥陀仏の本願を信じて念仏をとねえることから、真実の生き方が生まれ、阿弥陀仏の世界へ往生することができると説きつづけた。そして、「南無阿弥陀仏」の念仏は、多くの人びとの救いとなった。法然上人は、煩惱にとらわれた人間の哀しみをみつめ、新たな救いを見出したのである。

「浄土門は愚痴に還りて極楽に生ず」「智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし」が、法然上人の教えの到達点であった。ここには、なによりも自らのいたらなさを見つめる「愚者の自覚」があった。この人間観こそ、二十一世紀の諸問題を解決する出発点である。

仏教の根本思想は「縁起」である。縁起とは、すべての「いのち」はひとつに結ばれ、共に生かし、生かされることである。『願共諸衆生 往生安楽国』を願った中国唐の善導大師を師と仰いだ法然上人の心こそ、縁起の思想をふまえた「共生」である。この「共生」の教えこそ、二十一世紀の指針となる。浄土宗は、住職、寺族一丸となって、法然上人の心を家庭に、社会に、世界に広げていくことを誓う。

浄土宗

無量寺のホームページができました。

次のアドレスにアクセスして下さい。

<http://www5b.biglobe.ne.jp/kourin/>

念佛者の心

奈良県香芝市 正福寺住職 別府 空由上人

「お念仏の二ころ」

お念仏のことについて、私の心のあり様を少し述べてみようと思いついたのは、五十年の人生、一九五〇年に生れて二〇〇〇年を迎え、この年に三人目の男の子に恵まれたからである。亡き母の遺言は「母のことを想ふ心があるのなら世の為人の爲にお役に立てる生き方をして欲しい。」如何に生きればその心に応えられるのであろうかと考え続けて三十七回忌の春に、「つぎご観音」を正福寺境内にお迎えした次第である。母の事を想い、母が白磁の白衣観音を大切に奉持して私をこの世に迎えてくれた恩に報いる心での出来事である。ある人が、男は過去を引きつって生きる話していた事を思い出すと、私の十三才の正月二日、母は三十七才の時、宇佐八幡宮に参拝してその夜の食事の時、今日は神様と話をしていた。「おまえの役目は終わったから、もう私達のところに戻ってきなさい。おまえをこの世に送ったのは、この子を迎える為である、これ以上ではこの子の為にならない。」と子供達のことを思うと、死んでも死に切れない気持ちであるが、いつも見守っているから、困った時には必ず助けるから心配しないように、父さんはすぐに後妻を迎えて苦労するであらうが必ず見守り続けるからと話すことばの中に悲しみとあせりが入り乱れていた事が今も忘れられない。一月七日の早朝交通事故に会い、十日の昼に、その父の命日に死亡という出来事になったのです。生れた赤ん坊は母が全であり乳を得て育つのであるが、人間の体が育つだけでなく、人間の心が育つてい

るのではなからうか、乳を与える女性が母として育てられている様にも見て取れると共に、赤ん坊も体だけでなく心が育てられていると見て取れるのである。そもそも食物が乳となること、生命を育くみ人となり、そこに愛情が芽生えるという出来事、そしていわゆる乳離れといふか、心が自立する前に切り離される人生の出来事(縁)に出合つと、人生が左右される。これが善い方向に向くか悪い方向に向くかは心の強さに依るものと思われる。宗教的には信仰(願)があるかないかに依ると思われる。歴史を見ると、歴史的人物に於けるこの心のあり様が、歴史を左右しているのではなからうか、この事は各人の見識に問うものである。私自身の心の旅路は母の死に始まり、その遺言を引きつり、前にも後にも進めない日々を送った。ある時母の導きに依りてお念仏にこもり切る縁に恵まれて、如来様のお慈悲の心に育くまれてこそ心が楽にならせていただいたのである。いくら頭で考え納得しても、いざとなれば心の問題は解決出来ないものである。唯、如来様の乳というべきお念仏をいただく事に依つてのみ、如来様のお慈悲に育てられてのみ、心の問題は落着く先に落着かせていただけるものであった。お念仏の二ころを人の子、母と子の慈愛と照して如来様の乳と受けとめさせていただき、生涯飲み続ける人がこの世に溢れるならば、人の世に新しい時代が訪れるのではと夢みることも出来る。

「心の道」

私事ではあるが、母と子の出会いとして想い出を少し述べてみよう。小学校に入学した日の朝、新しい制服に身を包まれたうれしい朝、私の目に最初に映つたのは、母の足に靴下のない事が不思議で、何故お母さんは靴下をはいていないの、と質問した。そして僕が

大きくなったら働いて買ってあげるからと言った。

私は戦後開拓地(糸口山)で生まれ、昭和三十年頃の貧しい生活であった。母の答えは、観想う気持ちを大切に育てて社会に役立てる立派な人になつてくれさえすれば、靴下を買ってもらふより親孝行だと答えてくれた。小学校に入学して勉強に失望した。希望に満たされ目に見えない大きなものを想像していたのに、私の心の求むるところを教えてください。そこではなかった。ただぼんやりと日を過してしまつた。小学校から帰つてから、日曜日等、よく母の手伝いをした。その折々に母の語ることは、私の住んでいた世界はこんなところではなかつた、私の住んでいた世界とこの世とどう違うのか疑問であった。なつかしそつにその世界の話をしてくれるのである。子供心に雲に包まれたような気持ちになつたものである。母は信仰厚く白磁の観音菩薩の像を大切にしていた。ただし手のない像であった。母三十七才、私十三才の正月二日の夜、来るべき時が来た。私の世界に帰らなければならぬ。この世の別れ、私の使命は子供をこの世に迎える事であつたと、死別れの預言である。そして一月七日の早朝交通事故で十日の昼前にその父の命日に死亡したのである。三十七年間でこの世の便りが尽きたのである。私としてはどうして良いのか判らない。悲しみの内に流れる涙と共に私の心に生れて来たものは、母の言葉の重みを大切に育てて必らず願いを成就せんとする意志であつた。一人の生命がこの世と別れた時に、その子の心に大いなる意志の流れを生じさせたということが、忘れるか忘れないのかが大切なことと思う。悲しみの中から願心を生じたという事が、亡き母の悲願が生じたという事になり、これを心の問題として正面に据え置いて、これを解

決する為に発心するということ、如何にせん如何にせん、この為如何にせん、幸にして仏門に叔父がいて仏法を学ぶ縁があり、仏法に会いて始めて自分の心にならぬ学問のあること知る。これは自知の境界であると、私の私たる由縁を述べるものであるとの想いを生ずる。心の問題を解決するのにおよそ三十年の年月を要して四十三才にして縁ある念仏の教えに得心を得ることになる。今にして想えば釈迦も宗祖法然上人も母を想ふ人であり、母を亡くした心の寂しさが道心(心の道)を育てて、心の問題を正面に据え置いてこれを解決され、そして大いなる天然の理法に開眼してゆくのである。私も天然の理法に心を注いで一如の深まりを全うせんと日々私なりの精進にいそしむものである。程度の差こそあれ男いきを示してこそ人生なりと。寂しい心は母との出会いの時をさぐり、父と母は私の選べし縁なり、母の世を想ふ心に感じてその胎に入ることとする。資質を求むるに父の能力を必要として父を昔りると。父も母もこの世への道のために私が求めて必要としたものである。それ故に恩がある。欠け変えない尊い縁であつたが故に欠け変えない恩がある。父と母の恩は実に重いものであると感じ入るのである。この世に嘗々として続く出来事と心の世界に識れることには余りにも差がありすぎる。方便の道を示さなければ真理を具現出来ないところに如来の悲しみがあふ。それ故にこの空間に遍満するものは如来の悲願である。生ある者は生みの親、母の悲心、悲しい心なくみ取らない限り、この悲願に感鷹出来ないものである。それ故に人の世に死の縁と悲しい別れがあるということの真の意味を味わふこととなる。死の縁も如来の方便の教えなりとささるべきであらう。